

教えるための英文法

—— 比較表現編 ——

柏 野 健 次

要旨

英語の数ある文法項目の中で「比較表現」についての文献は内外とも比較的少なく、また現行の中学校の検定教科書を見てもその扱いはきわめて簡単である。これでは、生徒にとっても、また教える側の教師にとっても情報不足の感は否めないであろう。そこで、本稿では教えるための英文法のケース・スタディとして「比較表現」を取り上げ、形容詞の文字通りの意味と中立的な意味、as ～ as構文の表す本当の意味、as～as構文の表す語用論的な意味、「鯨の構文」の訳し方、比較級と否定、「no+比較級+than」と「as+形容詞+as」の比較、最上級とthe、日本の英語教育に見られる誤解について解説していきたい。その際、日本の学習英文法で知られていないこと、あるいは誤解されていることを中心に述べていくことにする。

本稿で明らかにした情報は自信をもって英語を教えるために、教える側の人間が必ず携えていなければならない種類のものである。「教えられたように教えるな」とよく言われるが、日本の英語教育界にあっては、かたくなに新しい知識の導入を拒み、従来の教え方を断固として変えようとしていない教師が多いと聞く。英語研究も医学の研究と同じように、分からなかったことが次第に分かってくるという性質を帯びているのであるから、教える側の人間の研鑽が切に望まれる。

はじめに

英語の数ある文法項目の中で「比較表現」についての文献は内外とも比較的少なく、また現行の中学校の検定教科書を見てもその扱いはきわめて簡単である。これでは、生徒にとっても、また教える側の教師にとっても情報不足の感はないだろうか。そこで、本稿では教えるための英文法のケース・スタディとして「(形容詞を用いた) 比較表現」を取り上げ、以下の8点に絞って解説していきたい。その際、日本の学習英文法で知られていないこと、あるいは誤解されていることを中心に述べていくことにする。

1 形容詞の文字通りの意味と中立的な意味

「(形容詞を用いた) 比較表現」について考える際には、まず形容詞に目を向け、その「文字通りの意味」と「中立的な意味」の区別を明確にしておくことが大切である。そこで本題に入る前に、how疑問文を出発点にこの点を明らかにしておきたい（例文中の大文字はストレスのあることを示す）。

(1) A: How OLD is he?

B: He is three years old./ He is eighty years old.

(2) A: HOW old is he?

B: Very old. / * Very young.

(3) A: HOW young is he?

B: He is seventeen years old./ * He is eighty years old.

(4) A: HOW beautiful is she?

B: Very beautiful./ * Very ugly.

cf. (?) How YOUNG is he? / (?) How BEAUTIFUL is she?

(1) のHow OLD is he?というAの問いに対してBはthree years oldともeight years oldとも答えることができるが、これはこのoldが「年を取っている」という意味ではなくて、年齢という中立的な意味を表しているからである。ところが、(2) のようにhowにストレスを置くと「彼は年を取っている」という前提をもつことになり、Very young.とは答えられなくなる。

(3) と (4) はyoungとbeautifulが使ってある例であるが、これらの場合は通例、当該の人が「若い」あるいは「美しい」という前提があると考えられる。そのため、(2) と同じようにhowにストレスが置かれると、He is eighty years old. やVery ugly.とは答えられない。なお、(4) のcfに見られるように、youngやbeautifulを用いた場合に、howではなくそれぞれの形容詞にストレスを置いた文は、ネイティブ・スピーカーの間でも、その容認性に揺れが見られる。

(1) から (4) のような「ばらつき」が生じるのは、形容詞のなかにはold-youngのように「客観的な測定値を表す形容詞」とbeautiful-uglyのように「主観的な判断を表す形容詞」が存在するからである (Gnutzmann et al. (1973))。年齢は何才と数字で表すことはできるが、美醜は数字では表し得ない。以下に具体例を挙げておこう。

(5) 客観的な測定値を表す形容詞

old-young, big-small, long-short, fast-slow, tall-short, wide-narrow, high-low, strong-weakなど

(6) 主観的な判断を表す形容詞

beautiful-ugly, intelligent-stupid, happy-unhappy, wise-foolishなど

ここで重要なのは、

(7) (5) の上限を表す形容詞 (例えば、old) は、文字通りの意味にも中立的な意味にも使えるのに対して、(5) の下限を表す形容詞 (young) と (6) の形容詞 (beautiful, ugly) は文字通りの意味にしか使えない

という事実である。

これは、日本語でも「大きさ」「高さ」「広さ」のように、「大きい/ 小さい」「高い/ 低い」「広い/ 狭い」の各ペアの上限を表す形容詞が中立的な意味を示すのに使われることを考えれば容易

に理解できる。

以上のような議論を踏まえたうえで、本題の比較表現の検討に移ろう。例えば、次の (8) では、(5) のタイプの上限を表す形容詞 *old* が用いられているが、これは必ずしも「私は彼と同じくらい年を取っている」という意味にはならず、通例は「私と彼の年齢が同じ位である」という意味を表している。したがって、ともに10歳でも90歳でも構わない。

(8) I am *as old as* he/ he is/ him. ¹⁾

その証拠に私たちは何の矛盾もなく、I may be short, but I'm *as tall as* you. (Horn (1972)) と言うことができる。

ただし、同じ (5) のタイプの上限を表す形容詞でも上で触れた「前提」が述べられている場合に事情は異なる。次の例では「彼女は背が高い」という前提があるので、*as tall as* の部分は「彼女は姉と同じくらい背が高い」という意味を表すことになる。

(9) She was tall, almost, *as tall as* her eldest sister. (H. Robbins, *The Predators*)

これに対して (5) の下限を表す形容詞 (例えば、*young*) や (6) の形容詞 (*beautiful*, *ugly*) が *as* ~ *as* 構文で用いられると、それらは文字通りの意味しか表さない。

(10) He sounds young; maybe *as young as* Charlie. (B. Meltzer, *The Millionaires*)

(11) “Are they *as beautiful as* she is ?” “Not really.” (B. T. Bradford, *Just Rewards*)

ちなみに、比較級や最上級の構文では、「前提」がなければ、(5) のタイプの形容詞に関しては上限、下限を問わず中立的な意味を表すが、(6) のタイプの形容詞では中立的な意味か、文字通りの意味か、文脈がなければあいまいになる。以下に例文を列挙する。

(12) Bill is taller than George. [中立]

cf. Joe and Mike are both very short, but Joe is taller than Mike.

(13) Bill is shorter than George. [中立]

(14) Linda is more beautiful than Mary. [あいまい]

cf. Mary is not very beautiful but she's more beautiful than Sally.

(15) Bill is the tallest boy in the class. [中立]

cf. Joe is the tallest man in the room, even though he's not very tall.

(16) George is the shortest in the class. [中立]

(17) Linda is the most beautiful girl in the club. [あいまい]

(以上、すべてインフォーマント提供)

上記の考察から、前提がないという条件で *as* ~ *as* 構文と比較級・最上級の構文を比較すると、以下の表ようになる。

(18)

	as ～as	比較級・最上級
(5) の上限を表す形容詞	中立的	中立的
(5) の下限を表す形容詞	文字通り	中立的
(6) の形容詞	文字通り	あいまい

2 「A is as+形容詞+as B」構文の表す本当の意味

例えば、Mary is as tall as Jane.は「メアリーはジェインと背の高さが同じだ」という意味を表す
と一般に考えられているが、厳密に言うとはこれはMary is not shorter than Jane. (メアリーはジェ
インより背が低いということはない) という意味で、メアリーの身長がジェインと同じか、ある
いはそれ以上である (数学の記号で示せば、Mary's height \geq Jane's height) ことを述べている
(Bolinger (1972))。

この事実は Mary is as tall as Jane, maybe taller / * maybe shorter. (Horn (1972)) のような文の
存在からも証明される。また、本節の冒頭で挙げた文を否定にしたMary is not as tall as Jane. は
「メアリーとジェインは背の高さが同じではない」(Mary's height \neq Jane's height) という意味
ではなく、「メアリーはジェインほど背が高くない」(Mary is shorter than Jane. [Mary's height <
Jane's height]) という意味になる。つまり、(\geq) の否定であるから (<) を表すということで、
これも「A is as+形容詞+as B」構文が (\geq) を表すことの証左となる。

この「A is as+形容詞+as B」構文のもつ (\geq) という意味は、その前にat leastを付加すること
により明示化される。

(19) “In the Thirties, you mean? If so he must be at least *as old as* Dad, possibly older.”

(R. Goddard, *Days without Number*)

「30年代に、という意味？そうなら彼はパパより若いということはないわね。ひょっとしたら
年上かもね」

しかし、日常の言語使用にあつては、(>)であることを言いたければ比較級を使うことが多く、
そのためat leastがなければ (=) という意味になるのが普通である。なお、「メアリーはジェイン
と背の高さが同じだ」ということを明示したいときは exactlyを前に付けてMary is exactly *as tall as*
Jane.と言う。

ちなみに、1960年代前半にはas～asの否定はnot so～asだと教えられていた。しかし、最近では
むしろnot as～asを使うほうが普通になってきている。この2つの構文は通例、意味は同じだが、
soにストレスを置くと以下のように意味が異なることに注意したい (Bolinger (1972))。

(20) He is not *so tall as* his brother.

(His brother is taller but not necessarily very tall.)

(21) He is *not SO tall as* his brother.

= He is not as tall as his brother. (His brother is very tall.)

つまり、(21) では、「彼は兄のように、そんなに背は高くない」という意味になる。

3 「A is as＋形容詞＋as B」構文の表す語用論的な意味

形容詞が文字通りの意味を表す場合、この構文 (A is as＋形容詞＋as B) は、「Aだって形容詞の表す意味の点でBの基準に達している」という語用論的な意味を表す (ミントン (2004))。すなわち、「Aが劣っているという予想を覆す」働きをしたり、「Aを過小評価してはいけない」という意味を表すのである。これは従来、指摘されていない非常に重要な特徴である。

例えば、Many motels are as comfortable as hotels.では、「モーテルだって (安っぽく見られていたが) 快適さではホテル並み (かそれ以上) の所も多い」という意味を表すことになる。

この場合、主語 (A) には形容詞の意味から考えて「劣っているもの」がきて、2つめの as の後 (B) には「上位にあるもの」「代表的なもの」がくる。したがって、上例では、motelsとhotelsを入れ替えることはできない。

実例を挙げよう。(22) は俳優志望の男性の言葉であるが、彼にとってはクリント・イーストウッドは憧れの存在なのである。

(22) He stated that he wanted to be *as big as* Clint Eastwood. (J. Collins, *Hollywood Kids*)

(23) Andrew was almost *as stubborn as* their father. (R. Goddard, *Days without Number*)

アンドリューの頑固さといえば、彼らの父親に匹敵するくらいだった [父親の頑固さは周知のこと]

中学校の検定教科書に目を向けると、*One World* には以下の例が挙げられている。ロンドンの West Endが劇場街としてニューヨークのBroadwayに匹敵するくらい有名であることを述べたものがあるが、「Aを過小評価してはいけない」ということがよく分かる好例である。

(24) This area (*i.e.* West End) is *as famous as* Broadway in New York.

なお、2つめのas の後 (B) には「代表的なもの」がくるため、as silent as the tomb, as light as a feather, as free as a birdのような数多くの比喩用法が発達している。それぞれ、墓、羽、鳥は「静けさ」「軽さ」「自由」の代表格として選ばれている。

この場合、初めのasは (25) のように省略することが可能である。そのときは残ったasはcomparisonというよりもmannerを表すことになる。

(25) Next she turned to examine Caine. He looked terrible. His face was *white as a sheet*.

(A. Fawer, *Improbable*)

4 「鯨の構文」の訳し方

2008年発行の高校学習参考書にいわゆる「鯨の構文」の例が挙がっている。

(26) A whale is *no more* a fish *than* a horse is.

これは、宮内 (1966) によると、1906年の入学試験に出題されたというくらい古いもので、齋藤秀三郎『熟語本位 英和中辞典』(1915) にも掲載されている。日本ではno more ...thanの構文を説明する際に、この鯨を用いた (26) の文がよく使われるが、外国では全く知られていない。

我が国では、この文は「馬が魚でないのと同じように鯨は魚ではない」「鯨が魚でないのは馬が魚でないのと同じだ」という意味だと教えられている。しかし、この日本語は教室でしか通用しない特殊な日本語であり、日常、使うような自然な日本語ではない。

(26) の文の意味を考える場合には、この文は no を含んでいるという点に注目する必要がある。一般に否定文は「話の切り出し」には使えず、ある主張があつて、それに反駁するという形で現れるという性質をもつ。例えば、日本語で、「雨、降ってるよ」と言って話を切り出すことはできるが、突然、「雨、降ってないよ」とは言えない。もしそう発言すれば、相手に「雨、降ってるかって、聞きましたか」とけげんな顔をされるのが落ちだろう。

上記の (26) は、この発言の前にある人が、「鯨は魚だよ」と言ったことを受けて別の人が否定を強めるため、than以下に常識的に自明な事柄 (馬は魚ではない) を持ち出して、「鯨が魚と言うのなら馬だつてりっぱな魚だよ」(宮内 (1966) の訳) と反駁しているという状況が考えられる。実例を挙げる。

(27) “Your mother!” Martine hissed. “She’s *no more* your mother *than* I’m the Virgin Mary – ”

(U. Hall, *Secret*)

「(彼女が) あなたのお母さんですって？」とマーチーンは少し怒ったような声で言った。

「彼女があなたのお母さんと言うのならさしずめ私は聖母マリアというところね」

この論理の進め方は「背理法」と呼ばれ、ifを使って書き換えられる (Watkinsほか (1997))。

(28) He says he’s a priest, but I don’t believe it; he’s *no more* a priest *than* I am the Pope.

→ He says he’s a priest, but I don’t believe it; *if* he’s a priest, I’m the Pope.

もしあいつが牧師だったら、さしずめ俺は法王だね [私訳]

なお、この構文のthan以下には常識的に自明な事柄のほか、話し手にとって自明の事柄も用いられる。²⁾

(29) Angela: You’re just a kid.

Jane: I’m *no more* a kid than you are! (*American Beauty* 映画シナリオ)

アンジェラ：あなたってまだ子どもね。

ジェイン：私が子どもって言うのなら、あなただつてりっぱな子どもじゃないの。

5 比較級と否定

本節では、よく問題となる「not＋比較級」と「no＋比較級」の相違について考えてみる。

例えば、①Tom is *not taller* than John. と ②Tom is *no taller* than John.を比べてみよう。前者はnotは文全体を否定し、誰かがTom is taller than John.と言ったことに対して他の人がその反論として、It is not the case that Tom is taller than John. (トムがジョンより背が高いということはない) という意味で発言したものであるが、一方、後者はnoはtallerだけを修飾し、「トムは背が低く (身長の低い) ジョンくらいしかない」という意味を表している。

このように、②のタイプでは形容詞は文字通りの意味を表し、than以下には「no＋形容詞」で示されている意味を特徴的に表すような人や物がくる。

(30) John is *no taller* than Mickey Mouse.

(31) Rosa slept in a basement room that was *no bigger* than a closet.

(S. Sheldon, *The Million Dollar Lottery*)

ローザの寝ている地下の部屋は狭くてクローゼットほどの大きさしかなかった。

上記の①、②のタイプはともに「トムはジョンと同じ身長か、それ以下」であることを伝えているが、頻度としては②のタイプのほうが高い。

6 「no＋比較級＋than」と「as＋形容詞＋as」の比較

5節で述べた「no＋比較級＋than」の構文と3節で述べた「as＋形容詞＋as」の構文とは正反対の意味を表すことに留意したい。例えば、次の2文を比べてみよう。

(32) This singer is *as popular as* that singer.

(33) This singer is *no more popular than* that singer.

(32) は「この歌手だってあの歌手ぐらいの人気はある」(this singer's popularity \geq that singer's popularity) という意味で、すでに人気があることが分かっている歌手を基準にして主語の歌手がいかに人気があるかを述べているのに対して (33) は「この歌手は人気がなくあの歌手ぐらいの人気しかない」(this singer's popularity \leq that singer's popularity) という意味で、人気がないことが分かっている歌手を基準にして主語の歌手がいかに人気がないかを強調している (ミントン (2004))。 ³⁾

なお、no better thanは主語の悪いところを強調して「…も同然」の意味でよく使われる表現である。

(34) The lock on the back door was *no better than* a child's plaything. (A. Fawer, *Improbable*)

裏口のドアの錠前はひどくて子どものおもちゃのようだった。

7 最上級とthe

例えば、the highest mountainのように、形容詞の最上級には the が付くと言われるが、正確には「形容詞の最上級＋名詞」全体にtheが付くと言うべきである。したがって、主格補語として形容詞の最上級が使われ、名詞が表されていない場合にはtheの省略が可能となる。

- (35) He'd told her over and over, no cell phones or cordless phones. Use landlines. They *were safest*.
(L. Howard, *Cry No More*)

彼は彼女に何度も携帯やコードレスではなくて固定電話を使えと言ってきた。固定電話は（盗聴もなく）一番安全なのだから。

この場合、They were the safest.あるいはThey were the safest phones.と言うことも可能であるが、
* They are safest phones.とは言えない。

このように考えると、一般に副詞の最上級にはtheが付かないという事実や形容詞の最上級でも「同じ人や同じ物の中で性質や状態を比較する場合」にはtheが付かないという事実がよく理解できる。ともに「後に名詞を補うことができない」からである。⁴⁾

- (36) She bought all the foods he liked *best*. (D. Steel, *Bittersweet*)

- (37) He was *happiest* when he kept to himself. (D. Steel, *Lone Eagle*)

彼は人と接触しないときが一番幸せだった。

しかし、ネイティブ・スピーカーの中には上のような場合にも機械的にtheを付ける人もいる。この傾向はアメリカ英語に多く見られ、あるアメリカ人は、(36) では70, 80%の人がtheを付け、(37) では20, 30%の人がtheを付けるだろうと指摘している。⁵⁾

形容詞の中にはmostを付けて最上級を作るものもあるが、mostはveryに近い意味も表すので、例えば、This area is most beautiful in October.は「この辺は10月が一番きれいだ」という最上級の意味か「この辺は10月になると非常にきれいだ」というveryに近い意味かであいまいになる。この場合、最上級の意味に解釈されるほうが普通であるが、最上級だからということで most beautiful の前にtheを付ける人もいる（ミントン(2004)）。

8 日本の英語教育に見られる誤解

この節では、「比較表現」に関して日本の英語教育界で誤解されていると思われる事柄を2点挙げておく。

8-1 as＋形容詞＋as any（＋名詞）

ある高校の学習参考書に

- (38) The Japanese are *as friendly as any* people in the world.
= The Japanese are *the most friendly* people in the world.

というように「as+形容詞+as any (+名詞)」と最上級は同じ意味だという記述が見られる。しかし、あるアメリカ人は『日本の「学校英語」に対するネイティブスピーカーのコメント集』の中で、この2文の同義関係に疑問を挟み、以下のようにコメントしている。

- (39) The meaning of these two sentences are not the same. The first implies a degree of friendliness (\geq) at least equal to that of any other people, while the second sentence clearly states that the Japanese are, in fact, the most friendly people, with a degree of friendliness ($>$) greater than any other.

つまり、すでに2節で述べたように、the Japaneseとany people in the world は(\geq)の関係を表すため、必ずしも最上級の意味にはならないのである。

この構文は通例は(38)のように、あるグループ((38)では、people)内での比較が表されるが、この場合、文脈上明らかであれば any の後の名詞は省略できる。

- (40) Her white bikini was *as brief as any* at the pool. (H. Robbins, *Never Enough*) [bikiniの省略]

このほか、「as+形容詞+as any (+名詞)」の構文は、当該の形容詞の意味を象徴的に表す名詞をanyの後にとり、主語の特性を強調することがある。これは3節で見たas light as a featherのような比喩用法と似ている点に注意したい。⁶⁾ 次の例では、何人かの女性はモデルではないが、モデルに匹敵するくらい容姿がいいと言っているのである。

- (41) There were dozens of girls everywhere, some *as perfect as any* model, all of them good-looking.
(R. Rendell, *The Rottweiler*)

あちこちに何十人もの女性がいた。中にはモデルに引けをとらないほど完璧なスタイルの女性もいたし、美人ばかりだった。

この用法では、(38)のように、あるグループ内での比較が表されているわけではないので、「最上級の意味を表している」と誤解されることはない。

以上で「as+形容詞+as any (+名詞)」には2つの用法があることが判明したわけであるが、(38)のタイプの用法と(41)のタイプの用法は、話し言葉では次のようにストレスの点で区別できる(インフォーマント情報)。

- (42) Bill was *as brave as ANY* soldier.

ビルは(兵士だったが)どの兵士にも劣らず勇敢だった。[(38)のタイプ]

- (43) Bill was *as brave as any* SOLDIER.

ビルは(兵士ではなかったが)勇敢さという点では兵士も顔負けだった。[(41)のタイプ]

8-2 much/ still more

2008年発行のある高校の学習参考書は He can speak French, *much (or still) more* English. の例を挙げているが、あるアメリカ人は『日本の「学校英語」に対するネイティブスピーカーのこ

ント集』の中で「現代英語では、“much more (meaning “and even more so”) + noun”は使わない」と述べている。私自身のインフォーマントも以下のようにmuch moreではなくて、to say nothing of や not to mention などを使うべきであると主張している。

(44) a. * He can speak German, *much more* English.

→ He can speak German, *to say nothing of* English.

→ He can speak German, and English even better.

b. * He loves his enemies, *much more* his friends.

→ He loves his enemies, *to say nothing of / not to mention* his friends.

田中 (1990) は英語の150の表現を取り上げ、100名のインフォーマントにそれぞれの表現を用いた文の作成を求めている書物であるが、このmuch moreを含む文を作成したインフォーマントは「皆無である」という報告を行っている。

ちなみにmuch/ still lessのほうは正しい英語で完全に容認される。ただし、頻度は低い。

(45) He can't speak English, *much less* German. (インフォーマント提供)

(46) “I've never seen purple underwear before, *much less* purple underwear with a man's name written on it.” (G. Gipe, *Back to the Future*)

おわりに

以上、本稿では教えるための英文法の立場から「比較表現」を取り上げ、8点に絞って解説してきた。これらは自信をもって英語を教えようとすれば、教える側の人間が必ず身につけていなければならない知識である。

「教えられたように教えるな」とよく言われるが、日本の英語教育界にあつては、かたくなに新しい知識の導入を拒み、従来の教え方を断固として変えようとする教師が多いと聞く。英語研究も医学の研究と同じように、分からなかったことが次第に分かってくるという性質を帯びているのであるから、教える側の人間の研鑽が切に望まれる。生徒が「なるほど」と目を見開くような授業をしたいものである。⁷⁾

注

* 本論文は大阪樟蔭女子大学の平成19年度特別研究助成費を受けて書かれたものである。

1) この場合、thanの後には書き言葉では he が、話し言葉では him が用いられる。he isはどちらの場合にも可能である。ちなみに、Bill is as old as George/ George is.のようにthanの後に代名詞ではなく名詞がくる場合は、書き言葉では両者ともに使われるが、話し言葉ではGeorgeのほうが普通である。

比較級構文、例えば、I am older than he / he is/ him.では、書き言葉では he と he isが、話し言葉では he is と himが用いられる。Bill is older than George/ George is.のようにthanの後に名詞がくるときは、書き言葉では両者とも可能であるが、話し言葉では Georgeしか使えない (インフォーマント情報)。

2) 同じタイプの例文を追加しておく。次は言語学の専門書からの引用である。

- (a) Such examples (*i.e.* If you got me a cup of coffee, I'd be very grateful.) are thus *no more* "counterfactual" *than* their non-distanced counterparts (*i.e.* If you get me a cup of coffee, I'll be very grateful.) .

(B. Dancygier and E. Sweetser, *Mental Spaces in Grammar*)

[大意] If you got me a cup of coffee, I'd be very grateful.が反事実を表すと言うのなら、If you get me a cup of coffee, I'll be very grateful.も反事実を表すということになってしまう。

ここでは、書き手は読者の If you got me a cup of coffee, I'd be very grateful.は反事実だという期待・予想に反駁する形でno more...thanの形式を使っている。

- 3) popularは (6) のタイプの形容詞で文字通りの意味を表す。
- 4) このように、「同じ人や同じ物の中で性質や状態を比較する場合」には最上級であってもtheは付けられないのが普通であるが、次のようにtheが付いた例も見受けられる。

- (a) By the time I returned to my car, I was the happiest I had been in weeks. I sang with the radio all the way home. (P. Cornwell, *From Potter's Field*)

本文の (37) と上の (a) はどのように違うのだろうか。私見では、前者が「一般論」を述べているのに対して、後者は「特定の時」に言及し、その特定の時の状態とそれ以前の状態の比較を行っている、という点で異なる。これは以下の対比例を見れば明らかだろう。

- (b) This lake is *deepest* at this point. [一般論]
- (c) It's been raining for a fortnight. This lake is *the deepest* it has ever been. [特定の時 (今) に言及]
- (d) Bill is *happiest* when he is alone. [一般論]
- (e) Bill is *the happiest* I have seen him for years. [特定の時 (今) に言及]

(以上、インフォーマント提供)

Huddleston and Pullum (2002) は、The price of gold is the lowest it has been for ten years.の例を挙げ、the lowest it has been for ten yearsは名詞句として機能していないが、theは義務的であると述べている。ただし、同書は「一般論」と「特定の時」の区別には触れていない。

- 5) 中学校の検定教科書を見てみると、*Sunshine* と *One World* は the bestの形を示しているが、*Total English* は (the) bestとtheに括弧を付けて示している。
- 6) 実際、The box is *as light as a feather*. は、The box is *as light as any feather*. に書き換えられる (インフォーマント情報)。
- 7) 大塚高信博士は1938年に上梓された『英文法論考』(研究社) の中で、Henry Sweetの*A New English Grammar* (2 volumes) のような画期的な名著が1891年と1898年に刊行されているにもかかわらず、一般の教育界では矛盾だらけの教科書が半世紀にも渡って使用されていることを嘆き、「伝統の力は偉大なもので、理知も一朝一夕に之を覆すことはできない」(4ページ。原文は旧仮名遣い) と述べておられる。この風潮は70年を経た現在でもあまり変わっていないのではないだろうか。

参考文献

Bolinger, D. (1972) *Degree Words*. Mouton.

英語教育研究会 (編) (1982, 1983) 『日本の「学校英語」に対するネイティブスピーカーのコメント集 (1) (2)』

アトランダム社。

Gnutzmann, C., R. Ilson and J. Webster (1973) “Comparative constructions in contemporary English.” *English Studies* 54, pp. 417-438.

Horn, L. (1972) “On the semantic properties of logical operators in English.” Ph.D. dissertation. (Yale University)

Huddleston, R. and G. K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. CUP.

ミントン, T.D. (水嶋いづみ訳) (2004) 『ここがおかしい日本人の英文法Ⅲ』 研究社。(比較表現についての論考が少ない中で本書は130ページに渡って詳細な議論を展開している。必読文献である)

宮内秀雄 (1966) 「英語における肯定と否定」『英語教育』1966年6月号。

田中茂範 (1990) 『データに見る現代英語表現・構文の使い方』アルク。

Watkins, G.・河上道生・小林功 (1997) 『これでいいのか大学入試英語 下』 大修館書店。